



最新の形態類型論の枠組みから見る日本語の形態類 型的性格について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 張, 麟声 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017298

最新の形態類型論の枠組みから 見る日本語の形態類型的性格について

張 麟 声

1. はじめに

19世紀に形態類型論 (morphological typology) が生まれた当時は、孤立語、膠着語、屈折語といったタイプによって世界の言語を一気に類型化してしまう勢いだったために、世間一般からも広く興味を持たれたが、間もなくその目標の実現は簡単ではないと分かり、下火になった。だが、その後、語順類型論 (word order typology) をはじめ、音韻類型論 (phonological typology)、語彙類型論 (Lexical typology)、言語変化類型論 (Typologies of Language change) などの言語類型論の諸分野が誕生、発展するに伴い、歴史が一番古い形態類型論も大きく変容を遂げ、現在最新のBickel and Nichols (2007) の枠組みに至っている。

もっとも、本稿で言う最新の形態類型論は、Bickel and Nichols (2007) だけではなく、その考え方を取り入れた概論書であるViveka (2012) も含まれる。後者は、骨組みはBickel and Nichols (2007) そのものだが、下位概念の配列や術語は一段と磨かれ、個別言語の例示もより豊富になっているゆえ、参照に値すると考える。

以下、第2節でこういった最新の形態類型論のモデルを紹介し、続く第3節で日本語の形態論を考察した先行研究を検討する。そして、第4節では最新の形態類型論の考え方をを用いて日本語の形態類型的性格を記述し、第5節をまとめとする。

2. 最新の形態類型論の考え方

19世紀に成立した形態類型論は、Bickel and Nichols (2007) の段階に成長するまでに、重要な段階をいくつか経過しているが、本稿で

はSapir (1921) とComrie (1989) という特に重要な2点への言及にとどめる。

2.1 Sapir (1921) について

Sapir (1921)¹では、まず世界の言語のすべてを、「孤立的」、「膠着的」、「屈折的」、「多総合的」の4タイプのいずれかに割り当てることは現実的に不可能だとし、その理由を次のように述べる。

ある言語が膠着的であると同時に屈折的であり、屈折的であると同時に多総合的であり、さらに、多総合的であると同時に孤立的であることさえ、ありうるのだ。(安藤貞雄訳 1998: 212)

また、英語における形容詞から名詞を派生する方法として、good→goodnessのようなタイプもあれば、heigh→height (高さ) やdeep→depth (深さ) のようなタイプもあるといった事実や、名詞の複数形の表示にbook: booksのタイプもあれば、deer: deer, ox: oxen, goose: geeseのようなタイプもあるといった事実言及し、従来の「屈折」という概念のままでは問題の解決にならないことを、次のように主張した。

かりに、「膠着的」言語とは、並置的な手法によって接辞添加をする言語の意味であるとするれば、融合的・象徴的な言語は、定義上、非膠着的な言語ということになる。しかも、この種の言語でありながら、精神において、ラテン語やギリシア語の屈折タイプとはまったく異質なものは何百というほど存在する、とだけはいうことができる。なんなら、そういう言語を屈折的言語と呼んでもよい。しかし、その場合は、屈折形式についての概念を根本的に修正する心構えがなければならない。(安藤貞雄訳 1998: 227)

¹ 引用に関しては、安藤貞雄訳 (1998) 『言語 一言葉の研究序説』を使う。

さらに、このようなことを踏まえて、「孤立的」、「膠着的」、「屈折的」といったタイプ分けにとって代わるものではないと断ったうえで、次のように、言語を「分析的」、「総合的」、「多総合的」という別の基準で分けることを提案している。

分析的言語とは、複数の概念を結合して単一の語にすることをまったくしない言語（中国語）、あるいは、節約しながらそうした言語（英語、フランス語）のことである。分析的言語では、文が常に最重要であって、語は二次的な興味しかない。

総合的言語（ラテン語、アラビア語、フィンランド語）では、概念がもっと濃密に群がり、語はもっと豊富な内容をもっているが、しかし、概して、単一の語の具体的な意義の射程を適度な範囲に保とうとする傾向がある。

多総合的言語は、その名の示すとおり、普通以上に総合的な言語のことである。語が念入りに作られていることは極端といつてよい。
(安藤貞雄訳 1998 : 221)

2.2 Comrie (1989) について

Comrie (1989) の貢献については、3点に絞って述べる。

1点目は、まず次の引用にあるように、「屈折」という用語を辞め、代わりに融合的 (fusional) を使用することを提案し、用語の精密化を図ったことである。

孤立的言語と対照的に、膠着的言語と融合的言語はどちらも屈折を持っているわけであり、そのため、この2つのタイプの一方だけを「屈折」((in) flecional) を基にした用語を使うことは、誤解を招く恐れがある。その代わりに、融合的という用語を使えば、この術語上の問題はうまく解決できる。

(松本克己・山本秀樹訳 1992 : 46)

今1つの貢献は、以下の引用が示しているように、事象を1つのパラメーターで見るという従来のやり方に対して、パラメーターを2つ用いることを提案したことである。

要するに、ここで示唆されることは、あらゆる形態的タイプをカバーするように意図された単一のパラメーターという観点で形態的類型論を扱うことはやめて、むしろ、2つのパラメーターで考えていくべきだということである。このパラメーターのひとつは、単語ごとの形態素の数で、その2つの極が孤立型と多総合型ということになる。もうひとつのパラメーターは、単語内部の形態素がどの程度容易に分割できるかというもので、その2つの極が、膠着（分割はきわめて明瞭）と融合（分割は不可能）である。この2つのパラメーターをそれぞれ、総合の指数、融合の指数と呼ぶことにしよう。（松本克己・山本秀樹訳 1992：47-48）

3点目は上述のSapir（1921）の「全体的類型論」は成り立たないといった指摘を受け、全体的類型論を目指す代わりに、言語の各部分の性格を明らかにすることによって、「総合の指数と融合の指数によって定義づけられる連続体上のある位置をそれぞれの言語に振り当てられる」（松本克己・山本秀樹訳 1992：48）という「連続的類型論」を提唱したことである。

2.3 Bickel and Nichols (2007) について

Bickel and Nichols（2007）では、上述の、コムリーの提唱した「連続的類型論」の立場に立ち、サピア（1921）が言う「屈折形式についての概念を根本的に修正する心構えがなければならない」という主張を実行に移すがごとく、Comrie（1989）の「融合の指数」を3つのパラメーターに分けたうえ、「総合の指数」を加えて、総数4つのパラメーターによる言語記述のモデルを提案した。その4つのパラメーターの具体相は、以下の通りである。

① Fusion (融合性)

Fusion (融合性) について、上述のComrie (1989) では、「その2つの極が、膠着 (分割はきわめて明瞭) と融合 (分割は不可能) である」(再掲) のように、膠着と融合を二極に置く構造を取っているが、Bickel and Nichols (2007) のFusion (融合性) は、三項からなる、次のようなグラテーション構造をなすとされる。

isolating > concatenative > nonlinear

(Bickel and Nichols 2007 : 180)

このモデルでは、まず文法的意味を表す実体 (=formatives) は、線状的に並べられているかどうかを見る。線状的に並べられているケースのうち、文法的意味を表す実体 (=formatives) が音韻的に完全に自由な形態素 (full-fledged free phonological words : 180) であればisolating (孤立的) だとされ、音韻的に拘束形態素である場合はconcatenative (連鎖的) だとされる²。

一方、文法的意味を表す実体 (=formatives) が線状的に並べられていないケースはnonlinear (非線状的) として、グラテーションの右の極に据えられた。従来の「屈折」、すなわちComrie (1989) のfusion (融合) のうちの、文法的意味を表す実体 (=formatives) が線状的に並べられていない部分がこのnonlinear (非線状的) にあたり、それ以外の部分は、これから述べるExponence (具現性) と、Flexitivity (異形態性) という2つのパラメーターによってとらえることになった。

nonlinear (非線状的) には、次のように5つの下位分類が含まれ

² ここで言うconcatenative (連鎖的) は、従来のagglutinative (膠着的) とあまり変わらない。agglutinative (膠着的) を使う代わりにconcatenative (連鎖的) という術語を新造したのは、agglutinative (膠着的) は、音韻的境界を越えた (go far beyond phonological oundness) 実体の並びも含意してしまうくらいがあるからだという (Bickel and Nichols 2007 : 182)。

る (Viveka 2012: 98-100))。なお、各ケースにおける術語の日本語訳、及び内容に関する説明は、原典に対する筆者の理解を示したものである。

(1) **ablaut** (母音交代)

アフロ・アジア語族の一部の言語のように、動詞の基本形が子音から構成され、その子音の間に異なる母音のペアを挿入して文法的な意味を表しわけけるタイプ。

(2) **Suprasegmentals** (超分節)

声調などの音声的手段によって文法的な意味を表しわけけるタイプ。

(3) **Replacement (1) : substitution** (代用)

母音を置き換えることによって文法的な意味を表しわけけるタイプ。

(4) **Replacement (2) : suppletion** (補充法)

英語のgoとwentのように音韻的に関係のない形を用いて文法的意味を表しわけけるタイプ。

(5) **subtraction** (削減)

基本形の母音を短くしたり、子音を減らしたりして、文法的な意味を表しわけけるタイプ。

② **Exponence** (具現性³)

従来の屈折,すなわちComrie (1989) のfusion (融合) のうちの、1つの文法的意味を表す実体が1つの文法カテゴリーの意味だけ表すか、それとも、複数の文法カテゴリーの意味を表すかという側面を持つ部分は、このExponence (具現性) というパラメーターでとらえることになる。このパラメーターは両極から構成され、一極は1つの文法的意味を表す実体が1つの文法カテゴリー的意味だけを表すseparative (分離的) というタイプであり、もう一極は1つの文法的

³ 定訳がないので、筆者が『言語学大辞典 6 術語編』を参考にして作った。

意味を表す実体が複数の文法カテゴリー的意味を表すcumulative（累積的＝非分離的）というタイプである。前者のseparative（分離的）は、例えばトルコ語の数と格がそれぞれ別々の実体によって表されている現象を指し、後者のcumulative（累積的）は、例えばラテン語のように、数と格が1つの実体によって表されている現象を指す。

separative（分離的）とcumulative（累積的）の対立は、Viveka (2012) における次のTable 5.1（引用に際して不要な番号を省略した）が示しているように、Exponence（具現性）にだけではなくて、isolating（孤立の）、non-linear（非線状的）にも見られる。

Table 5.1 The six logical combinations of fusion and exponence

	Isolating	Concatenative	Non-linear
Separative	Kasong	Meitbel	Dinka
Cumulative	Wali'	Spanish	Modern Hebrew

Viveka Velupillai (2012 : 104)

③ Flexitivity（異形態性）

上の2つのパラメーターでとらえた部分以外の、従来の屈折、すなわちComrie (1989) のfusion（融合）の残る部分は、このFlexitivity（異形態性）というパラメーターでとらえることになる。このパラメーターも二極型で、文法的カテゴリーを表す実体に異形態素が存在するか否かがその両極をなし、異形態素が存在すればflexive（異形態的）で、その逆はnonflexive（非異形態的）である。

だが、近接する音素間に同化現象が起こり、その結果生まれたバラエティはflexive（異形態的）と見なされない。例えば、英語の動詞の過去形表示のwalked/jogged/patted ⇒ t/d/ɪdや、名詞の規則的複数形であるhawks/dogs/horses ⇒ s/z/ɪzなどはflexive（異形態的）ではない。無声子音の後では無声子音（tまたはs）、有声子音の直後では有声子音（dまたはz）になるのは、同化の結果だからである。これに対して、ドイツ語の5種類の複数表示である-e、

-er, -(e)n, -s, - \emptyset はflexive (異形態的)だとされる。同化とは違う原理による現象だからである。

Flexitivity (異形態性), Fusion (融合性), Exponence (具現性) という3つのパラメーターは, 従来の屈折, すなわちComrie (1989) のfusion (融合) を分解して, 打ち立てたものである以上, 三者は当然ながら, 1つの言語のなかで共存する。Viveka (2012) では, 以下のように, 三者間の組み合わせの一部を, Table 5.2 とTable 5.3 を用いて示している。

Table 5.2 The four logical combinations of flexion and exponence

	Flexive	Nonflexive
Separative	German	Hawai'i Creole English
Cumulative	Warlpiri	Pichi

Viveka Velupillai (2012 : 107)

Table 5.3 The six logical combinations of flexion and fusion

	Isolating	Concatenative	Non-linear
Flexive	Sierra Otomi	German	Hebrew
Nonflexive	Pichi	Turkish	Kisi

Viveka Velupillai (2012 : 108)

Tableを1つ用いるのではなく, 2つ用いたのは, 3つの角度からのデータを1つのTableによって表示することが難しいためであろう。Table 5.2 とTable 5.3 の両方を読めば分かるように, 従来の類型論では, ドイツ語は屈折語と分類されていたのだが, この最新モデルだと, 「Concatenative (連鎖的)+Separative(分離的)+Flexive (異形態的)」として表示されることになる。従来の屈折, すなわちComrie (1989) のfusion (融合) というパラメーター一つで記述することを, Fusion (融合性), Exponence (具現性), Flexitivity (異形態性) という3つの分立したパラメーターで, 記述することに

なったので、言語の形態的性格をより緻密に記述できるようになったことは言うまでもなからう。

④ Synthesis (総合性)

Comrie (1989) で2番目のパラメーターとされている「総合の指数」は、最新のバージョンでは、この4番目のSynthesis (総合性) となっている。ただし、Comrie (1989) では総合の指数は「2つの極が孤立型と多総合型」とされているのに対して、ここでは、サビア (1921) に戻り、次のように3つの段階からなるグラントーションとされている。

analytic > synthetic > polysynthetic

Viveka (2012: 108)

語が語幹と語尾に分けられない場合はanalytic (分析的)、語が語幹と語尾に分けられ、且つ、中にlexeme (語彙的な意味を持つ成分) が1つだけ含まれている場合はsynthetic (総合的)、そのlexeme (語彙的な意味を持つ成分) が2つ以上含まれている場合はpolysynthetic (多総合的) とされる。

やや分かりづらいpolysynthetic (多総合的) について、Viveka (2012) では、I am making a son dry a skin/skins. という意味を一語で表すAlutor語 (ロシアで話される) の例によって説明されている (Viveka 2012:109)。I, son, dry, skin という4つのlexeme (語彙的な意味を持つ成分) が一語のなかに含まれているということは、すなわち、我々が日常的によく知っている言語で単語となっている実体がこの種の言語では単語の一構成要素に成り下がっているのである。

3. 日本語を形態類型論的に考察した先行研究

この節では、日本語を形態類型論的に考察した先行研究について検討する。代表的だと思われる先行研究に、鈴木重幸 (1972)、同

(1996), 城田俊 (1998), 及び河野六郎 (1989) があり, いずれも日本語の動詞と名詞の形態類型的性格が異なる立場を取っているが, 動詞と名詞の形態類型的性格についてのとらえ方は, 以下述べるように, 前の二人の研究者の立場は似ていて, 河野六郎 (1989) だけが違うことになっている。

鈴木重幸 (1972) では, その第1部序論の序説において, 次のように述べられており, 同 (1996) も同じ立場である。

動詞の文法的な形は,

yom-u	kak-u
yom-o	kak-o
yom-e	kak-e

のような語尾のとりかえ (屈折) という文法的な手つづきによってつくられる。

名詞の文法的な形は,

yama=ga	umi=ga
yama=o	umi=o
yama=ni	umi=ni

のようなくっつきのとりにつけ (膠着) という文法的な手続きによってつくられる。 (p. 38)

以下のように城田俊 (1998) も同じ考え方である。

動詞は主に屈折とも見える形態変化によって文法意味を示すのに対し, 名詞は膠着的手段で文法上の関係を表す。 (p. 1)

一方, 河野六郎 (1989) では, 動詞については, 「原則として, 1つの範疇を1つの接辞で表そうとするところから, 接辞は, 明確に区分されて示され, したがって, 「膠着」という形成原理が取られるのである」 (p. 1582) のように, 膠着的とし, 一方, 名詞については, 「日

本語では、初めから名詞に格範疇が欠けていて、もっぱら助詞によって表されてきた。助詞は、機能上は付属的要素であるが、語としては独立したものであって、印欧語の名詞に見られる格語尾ではない。かくて、日本語の名詞は文法範疇という点からすると、まったく無規定的で、孤立的である」(p. 1580) というように、孤立的だとみなしている。

4. 考察

先行研究の是非を論じ、本稿の立場を述べるには、形態類型論で問題にされる名詞の文法カテゴリーと動詞の文法カテゴリーの構成要素をまず整理しておく必要がある。以下、4.1でこの作業を行い、続く4.2においては、整理された構成要素を検討することによって、日本語の名詞と動詞文法カテゴリーの性格を明らかにする。

4.1 名詞及び動詞の文法カテゴリーの構成要素について

4.1.1 名詞の文法カテゴリーの構成要素は、普通、性、数、格の3つとされるが、1つ目の性は、単語ごとに内在的に男性か、女性か、または中性かと決まっており、統語的環境によって選択されるものではない。したがって、形態類型論で実際に問題にされるのは、数と格の2つである。もっとも、一部の所有接辞を持つ言語では、所有接辞の人称が加わり、3つになることがある。

4.1.2 一方、動詞の文法カテゴリーに関しては、研究者によってその数が違い、亀井孝他編著(1995)『言語学大辞典 第6巻 術語編』が最多で、人称(person)、時称(tense)、アスペクト(aspect)、態(voice)、法(mood)、性(gender)、去来相(orientation)の7つまでがあげられている。だが、形態類型論では、普通TMAと呼ばれるテンス、ムード、アスペクトの3つにだけ関心が持たれ、もっとも、照応を持つ言語では、人称(person)と性(gender)が加えられて、4つか5つになることがある。一方、去来相(orientation)と態(以下、ヴォイスと呼ぶ)が不問にされているのは、おそらく前者は持つ

言語がたいへん少なく、普遍的な文法カテゴリーになっていないため、また、後者は、鈴木重幸(1996)における次のような分類が示しているように、そもそもていねいさや認め方とともに、派生動詞の語幹を作る手段という性格のもので、統語的環境によって選択される語尾的なものではないためであろう。

A 機能的なカテゴリーの形。それぞれが形態論的な形の体系を持つ。

(a) 終止形, (b) 連用形, (c) 連体形, (d) 接続形

B 基本動詞と派生動詞の対立, 補助動詞のあり／なしの対立による形態論的なカテゴリーの形。この形は、さらにAにしたがって語形変化して、文の中にあらわれる。

B-1 文法的な派生動詞と基本動詞との対立(文法的な接尾辞のあり／なし)による。

(a) ていねいさ, (b) みとめ方, (c) ヴォイス

B-2 補助動詞のあり／なしの対立による。

• アスペクト (pp. 46-47)

では、TMAと呼ばれるテンス、ムード、アスペクトにおけるアスペクトがなぜA機能的なカテゴリーに入れられていないかということになるが、理由は動詞におけるアスペクトは、名詞における性と似ていて、単語ごとに内在的に有するものと考えられ、一部の言語、例えばロシア語では、動詞が最初から非完結相(完了体)と完結相(完了体)の対として存在し、また、そうではない言語でも、例えば日本語のような言語では、以下の工藤真由美(1995)の表1が示しているように、「完成相」=「完結相(完了体)」対「継続相」=「非完結相(完了体)」という形で対立をなす語幹部であり、統語的環境によって選択される語尾的なものではないからである。

表 1

テンス \ アスペクト	完成相	継続相
非過去	スル	シテイル
過去	シタ	シテイタ

(p. 8)

TMAからアスペクトを除けば、テンスとムードが残る。テンスとムードについては、この段階でまず形態類型論を生み出した欧米言語学の文献と日本語学の文献における術語の調整、及び日本語におけるその該当形式の確認が必要である。形態類型論における英語の文献で用いられているムードの術語である直説法 (indicative)、接続法 (subjunctive)、命令法 (imperative) と鈴木重幸 (1996)、城田俊 (1998) の語尾形の大まかな関係は、次の表 2 の通りである。

表 2

印欧語文献	鈴木重幸 (1996)	城田俊 (1998)
直説法 (indicative)	(a) 終止形	(I) 終止形
命令法 (imperative)		
接続法 (subjunctive)	(b) 連用形	(II) 連用形
	(c) 連体形	(III) 汎用形
	(d) 接続形	

形態類型論を生み出した欧米言語学の術語である直説法 (indicative)、接続法 (subjunctive)、命令法 (imperative) を基準に据え、日本語の実態を考慮して、本稿では、日本語の終止形と接続形に含まれる次の 4 種類のムードを考察の対象とする。

- 終止形：① 直説法 (indicative)
 ② 命令法 (imperative)

③ 勧誘法 (cohortative)

接続形：④ 接続法 (subjunctive)

ムードの形が決まったので、続いてテンスについて考えるが、テンスはムードにおける直説法 (indicative) においてしか分化が見られない。このことを逆に言えば、テンスの形は、未来であれ、現在であれ、過去であれ、そのいずれも常にムードの直説法 (indicative) の意味を持ち合わせているのである。そのために、動詞の文法的カテゴリーを考えると、テンスとムードはそれぞれ層をなしているのではなく、二つで一つの層をなすことになる。つまり、照応に関する人称 (person) と性 (gender) を持たない言語では、動詞の文法カテゴリーにおいては、意味的なカテゴリーとしてムードとテンスの二つがあっても、1つの層としてしか具現されないのである。言い換えれば、照応に関する人称 (person) と性 (gender) を持たない言語の動詞の文法カテゴリーは、② Exponence (具現性) というパラメーターにおいて、デフォルト的にseparative (分離的) になる。論理的にcumulative (累積的=非分離的) になりえないからである。

以上述べたことをまとめると次の通りになる。

- ① 名詞の文法カテゴリーの層をなすのは、普通数と格の2つであり、一部の所有接辞を持つ言語では、その意味する人称が加わり、3つになる。
- ② 動詞の文法カテゴリーの層をなすのは、普通ムードだけの層か、ムード兼+テンスの層かであり、どちらにしても1つしかない。もっとも、一部照応を持つ言語では、人称 (person) と性 (gender) が加わり、層が3つになることがある。
- ③ 日本語は数も所有接辞も照応も持たない言語である。したがって、名詞の文法カテゴリーにおいて考察の対象になるのは格表示一つだけであり、動詞の文法カテゴリーにおいて、ムードとテンスの二つになるが、ムードとテンスは文法的意味の層の一つしかなさないので、層の数という点においては、一つになる。

4.2 具体的考察

4.2.1 日本語の名詞の文法カテゴリーについて

上述の通り、日本語には数も所有接辞もないので、名詞の文法カテゴリーとしては、格表示しか研究の対象にならない。その格表示は、河野六郎（1989）では「機能上は付属的要素であるが、語としては独立したものであって、印欧語の名詞に見られる格語尾ではない。」（再掲）と指摘されているが、河野六郎（1989）における「語として」の「語」は「文法語（grammatical words）」であり、韻律語（phonological words）ではない。日本語の格助詞は、以下の日本語教育学会編（2005）における3モーラ名詞のアクセント記述の例に見られるように、そのくつつくホストと1つのアクセントを形成することになっているので、韻律的（phonological）に独立していないのである。

3モーラの名詞を例にとると、次の4つの方が見いだされる（ここでは高を●、低を○で表す）。伝統的な研究では、それぞれ (a) 頭高型、(b) 中高型、(c) 尾高形、(d) 平板型と呼んでいる。

- (1) a. いのち (が) ●○○○
 b. ころ (が) ○●○○
 c. おとこ (が) ○●●○
 d. ねずみ (が) ○●●● (p. 20)

音韻的に独立した自由形態素ではなく、独立しない拘束形態素であれば、isolating（孤立的）ではなく、concatenative（連鎖的）ということになる。ちなみに、Bickel and Nichols（2007）におけるconcatenative（連鎖的）は、以下の引用から分かるように、印欧語の名詞に見られる格語尾のような接辞（inflectional desinences）だけでなく、日本語の格助詞のような接語（cliticized formatives）も含まれる。河野六郎（1989）が指摘した印欧語の名詞の格語尾と日本語の助詞の間の違いは存在するが、concatenative（連鎖的）と認定される障害にはならない。

Concatenative formatives are phonologically bound and need some other word for their realization. They include inflectional desinences as well as cliticized formatives.

(Bickel and Nichols 2007 : 181)

続いて、② Exponence (具現性) の角度から見るが、上述の通りに、日本語の名詞のカテゴリーにおいて文法的意味の層は格表示の1つしかないために、separative (分離的) となる。また、③ Flexitivity (異形態性) の角度からは、日本語の格表示には異形態がないために、nonflexive (非異形態的) であり、最後の④ Synthesis (総合性) の角度から見れば、日本語の格助詞の一部は、省略することもできるほど独立性が高いもので、前の名詞と語幹、語尾の関係を構成しているとは考えられない。したがって、synthetic (総合的) ではなく、analytic (分析的) と見なすべきだと思われる。

ここで改めて先行研究を振り返るが、鈴木重幸 (1972), 同 (1996), 城田俊 (1998) の膠着説は、新しいモデルでは、① Fusion (融合性) におけるconcatenative (連鎖的) として見直され、河野六郎 (1989) の「日本語の名詞は文法範疇という点からすると、まったく無規定的で、孤立的である」という考え方は、新しいモデルでは、④ Synthesis (総合性) におけるAnalytic (分析的) ということで再現することになるのである。

4.2.2 日本語の動詞の文法カテゴリーについて

鈴木重幸 (1972), 同 (1996), 城田俊 (1998) では、以下の鈴木重幸 (1972) に見られるムードの語尾である「u, o, e」や動詞過去形の「- (~) ta」を、おそらく屈折的語尾 (inflectional desinences) だとみなしたために、屈折的であるとしたのであろうが、新しいモデルでは認定の仕方が異なってくる。

yom-u	kak-u
yom-o	kak-o
yom-e	kak-e

同じ「読む」と「書く」を本稿でも例に取り、その4つのモード、及び直説法 (indicative) に見られるテンスの分化を以下の表3で示しておく。接続法 (subjunctive) モードについては、後続形をよく見られる2種類に限定した。

表3

	直説法		命令法	勧誘法	接続法	
	非過去	過去			「て」接続	「ば」接続
読む	yom-u	yom-da	yom-e	yom-o(u)	yom-de	yom-eba
書く	kak-u	kak-ita	kak-e	kak-o(u)	kak-ite	kak-eba

この表3で分かるように、日本語のモードを表す実体もテンスを表す実体も線状的に並べられており、また、それ自体で独立したアクセントを持たないために、① Fusion (融合性) というパラメーターの角度から見れば、concatenative (連鎖的) である。

続いて、② Exponence (具現性) の角度から見るが、上述のように、日本語の動詞は照応をしないので、文法的意味の層が一つしかなく、したがって、デフォルト的にseparative (分離的) になる。また、③ Flexitivity (異形態性) の角度からみると、五段マ行動詞である「読む」の過去形や「て」接続法の語尾と、五段カ行動詞である「書く」の過去形や「て」接続法の語尾とが、濁音か清音かで異なっているが、同化現象の結果であり、nonflexive (非異形態的) と見なされる。

最後に④ Synthesis (総合性) の角度から見ると、日本語の動詞は、明らかに語幹と語尾から構成されているために、analytic (分析的) という類型がまず排除され、また、lexeme (語彙的な意味を持つ成分) は1つしか含めないために、polysynthetic (多総合的) ではな

く, synthetic (総合的) となる。

5. おわりに

本稿では, Bickel and Nichols (2007) が提唱した, Fusion (融合性), Exponence (具現性), Flexitivity (異形態性), Synthesis (総合性) という4つのパラメーターから構成される最新の形態類型論のモデルを導入し, その各パラメーターにおける下位分類の基準を用いて, 日本語の形態論に関する先行研究を検討し, 名詞, 動詞及び日本語の総合的な文法カテゴリーの形態類型的性格について, 以下のような主張を打ち出した。

日本語の名詞の文法カテゴリーは, concatenative (連鎖的), separative (分離的) で, nonflexive (非異形態的), analytic (分析的) である。一方, 動詞の文法カテゴリーは, concatenative (連鎖的), separative (分離的) で, nonflexive (非異形態的), synthetic (総合的) である。全体として, 名詞がanalytic (分析的) である以外は, 日本語は, 名詞の文法カテゴリーと動詞の文法カテゴリー間の違いが小さく, 均質的言語だと言える。

ちなみに, Dryer & Haspelmath (eds.) (2013) の, Chapters 20 Fusion of Selected Inflectional Formativesでは, 日本語はExclusively concatenativeとされ, 同Chapters 21 Exponence of Selected Inflectional Formativesでは, 日本語はMonoexponential caseとされている。

前者のExclusively concatenativeと対立する項目として, Exclusively isolating, Exclusively tonal, Tonal/isolating, Tonal/concative, Ablaut/concative, Isolating/ concativeなどがあげられているから, そのExclusively concatenativeは本稿のconcatenative (連鎖的) とそれほど違わないと判断できる。また, 後者のMonoexponential については, 同Chapters21において, 「monoexponential (or separative)」というような記述が見られるので, 本稿のseparative (分離的) と同じ意味だと考えられる。

Dryer & Haspelmath (eds.) (2013) におけるChapters 20, 同

Chapters 21の執筆者は、本稿で最新の形態類型論の研究と称しているBickel and Nichols (2007)と同じ研究者であり、すなわち本稿で用いる方法論を立ち上げた存在である。一方、Dryer & Haspelmath (eds.) (2013)は、研究の結論としてのデータを表示する言語の構造に関する「世界地図」であり、日本語の何をどう分析して、そのような結論に至ったかについては、当該文献では示されていない。また、Fusion (融合性)、Exponence (具現性)、Flexitivity (異形態性)、Synthesis (総合性)という4つのパラメーターのうち、Dryer & Haspelmath (eds.) (2013)において取り扱われているのはFusion(融合性)とExponence(具現性)の2つだけである。ゆえに、先行研究としてあげるのではなく、本稿の最後で言及することにした。

参考文献：

- 安藤貞雄訳(1998)『言語 一言葉の研究序説』, 岩波書店
 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著(1989)『言語学大辞典 第2巻 世界言語編(中)』, 三省堂
 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著(1995)『言語学大辞典 第6巻 術語編』, 三省堂
 河野六郎(1989)「日本語の特質」, 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著(1989)『言語学大辞典 第2巻 世界言語編(中)』, 三省堂
 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト 一現代日本語の時間の表現一』, ひつじ書房
 城田俊(1998)『日本語形態論』, ひつじ書房
 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』, むぎ書房
 鈴木重幸(1996)『形態論・序説』, むぎ書房
 日本語教育学会編(2005)『新版日本語教育辞典』, 大修館書店
 松本克己・山本秀樹訳(1992)『言語普遍性と言語類型論』, ひつじ書房

Bickel, Balthasar and Nichols, Johanna. 2007. Inflectional Morphology. In Shopen, Timothy (ed.), *Language Typology and Syntactic Description 3 Grammatical Categories and the Lexicon*. Cambridge: Cambridge University Press. (2nd edition).

Comrie, Bernard. 1989. *Language Universals and Linguistic Typology: Syntax and*

- Morphology*. Second edition. University of Chicago Press.
- Dryer, Matthew S. & Haspelmath, Martin (eds.) 2013. *The World Atlas of Language Structures* Online. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology.
- Edith A. Moravcsik. 2013. *Introducing Language Typology* (Cambridge Introductions to Language and Linguistics). Cambridge University Press
- Sapir, Edward. 1921. *Language: An introduction to the study of speech*. New York: Harcourt, Brace and Company.
- Viveka Velupillai. 2012. *An Introduction to Linguistic Typology*. John Benjamins Pub Co

(大阪府立大学教授)